



小さなたねの物語が描かれたスタンドグラス（ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

## たねスタッフのつぶやき

通勤では、駅から10分程歩きます。駅から出るとすぐに田んぼが広がり、季節の移り変わりを肌で感じることが出来ます。

足を進め保育園の横を通ると、毎日警備員のおじさんが前に立っており、挨拶を交わします。この警備の方は子どもたちが来ると「フルネームで呼び、一人一人に声をかけ、ハイタッチで出迎えます。全員の名前を覚えていることに感化させられ、日々の記憶力の低下を実感している私にとっては羨ましい限りです。毎年、子どもたちも入れ替わるわけですから……。私も頑張らなくてはと思う、たねへと向かうのです。

今村（看護師）



## イメージが価値を生む

先日、箱崎中学校の人権学習の一環として、1年生の生徒にお話をする機会を頂きました。箱崎中学校は市内でも歴史ある学校で、地域も下町風情があり、最近では外国籍の子どもたちも多いと伺いました。担当の先生からは、この時期の生徒たちにとって、新しい友達関係が形成される中で、仲間を排斥する「ガイジ発言」（障がい児の蔑称）が、最近では目立つようになっていっていると聞かされてきました。

存在、可哀想な存在として、それは不幸を生きる価値の低い存在となります。一度根付いてしまった先入観を変えるためには、言葉の課題もありますが、直接出会うこと、何より子どもとの時の出会いが大切となります。しかし、特に障がいの重い子どもたちは特別支援学校へ行くことが多く、地域や地元の子どもたちと出会うことなどほとんどありません。私は、出会う機会が増えることを願っていますと話しました。

人権学習の当日は、武道場に集められた200人程の生徒たちにイメージは価値を生み出すという話から始めました。「障害」とは、

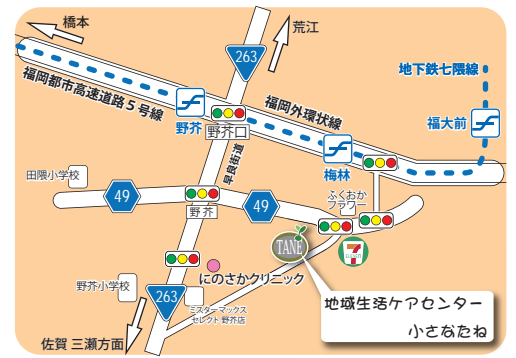


憧れの「お姉さん、になる！」

箱崎中学の校長先生は、南特別支援学校が最初の赴任先だったそうです。先生自身が、当初は戸惑いの方が多かったようですが、次

さわりのあるもの、進行を妨げるものですが、それは言葉だけのことでなく、私たちのイメージとなり、やがてその対象にマイナスの価値が根付きます。すると、障がい者は何もできない、何もわからない

第に一人一人の個性や特性がわかるようになると、見方が変わったと言われました。子どもたちが「ガイジ」から、「○○くん」「○○さん」となる出会いが生まれることを願います。



医療法人にのさかクリニック  
地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林 6-23-3  
電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052  
E-mail: chisanatane@tune.ocn.ne.jp



## 後記

もうじき息子（重心）の16歳の誕生日。帝王切開で急に取り上げられて、きっと寒かったろうと思うので、今でも布団をはいて起こす手はゆっくりになる。産院では生後すぐの映像を撮ってくれていて、息子の小さな姿も残っている。ただ手元にはあったものの気持ちが向かず、見たのは8歳を過ぎてからだった。最近テレビで『コウノドリ』という産科医療のドラマが放映されているが、心がザワつきそうで見ていない。ゼロ歳の頃、こども病院の個室で胸に抱っこして眺めた夕焼けは、16年経っても心細さとともに記憶に残る。（E）

所長 水野 英尚

# 自立・自律とは何？

1972年、アメリカカリフォルニア州バークレーに、障がいをもつ当事者が運営し支援提供を行う「自立生活センター」(Center for Independent Living) が設立されました。日本には、1980年代になり日本の当事者たちによって「自立生活センター」(通称C-1)が誕生し、現在では全国120カ所(福岡市には無い)に設立されています。「全国自立生活センター協議会」のホームページ <http://www.j-ipl.jp/> では、「私たちが考える自立とは、一人の人間として、その存在を認められることです。それは、ばかにされたり、いないものとして扱われるのではなく、守るべき者やヒーローとされることでもありません。自分の人生においてあらゆる事柄を選択し、自分の人生をじぶんなりに生きていくことです」と書かれています。本来、障がいがあってもなくても、この世に生を受けた者が、一人の人間として認められないことなど決してあってはならないことです。しかし、そう主張をしなければならぬほど、障がいをもって生きる彼(女)たちに対する社

会の「見えない障壁」は堅固で根深いものなのでしょう。東京都東大和市にあるNPO法人自立生活センター東大和理事長の海老原宏美氏は、自立とは「楽しく生きられる」(「まあ、空気でも吸って―人と社会：人工呼吸器の風がつなぐもの」海老原宏美・けえ子著、現代書館)ことだと語ります。

「たくさん友達がいること、趣味があること、人間関係が良好なこと、人の役に立っている仕事や活動に従事していること、自分の存在価値を認めてくれる人がいることなどです。このような条件が揃ったとき、人は『楽しく生きていよう』と思えるでしょう。そしてこの条件のすべて他者との人間関係の中で起こってゆくことです。つまり楽しく生きること、自立することは、単独では実現できず、社会との人との結びつきの中に実現できるものです」

障がいのある人たちにとっての「自立」とは、まずは社会参加を困難としている「障害」を、一つ一つ取り除くことから始めなければならないことでしょう。そこに必要不可欠なものが、人と人との繋がりであるということになります。人は誰でも多かれ少なかれ、他者や物(誰かが生産した)の力を借りて生きています。そうした意味では、全



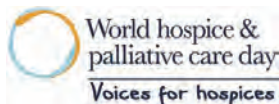
Hats On! (帽子をかぶろう!)



## 世界のホスピスと緩和ケアの日

毎年10月第2土曜日は「世界ホスピス緩和ケアの日」です。今年はこのさかクリニックでも、これに合わせ10月14日にポスター展示や音楽会を開催しました。

そしてその前日13日(第2金曜日)は、こどものホスピスと緩和ケアへの関心を高める日です。「こどもの緩和ケアへの関心を訴えて帽子をかぶろう」というIPCN(国際小児緩和ケアネットワーク)の呼び掛けにこたえ、小さなたねでも「Hats On!(帽子をかぶろう!)」と掛け声をかけて、みんなで帽子をかぶってみました。



こどものホスピスと  
緩和ケアのために  
あなたがすぐにできること



10月の第2金曜日に帽子をかぶって  
あなたのSNSに写真を投稿しよう!!  
ハッシュタグは #HatsOn4CPC

この日は世界中で、こどものホスピスと緩和ケア(CPC)に対する関心を高める日です。世界には21,000,000人もの命の制約(重い病気や障がい)のあるこども達がいます。しかし、十分なケアが受けられているのは、この中たった1%です。誰でも気軽に参加できます。「Hats On For CPC」一この言葉を広め、世界のどの国に住んでいても亮かなケアを受けられる環境を築くために、協力をお願いします。

医療法人のさかクリニック 地域生活ケアセンター小さなたね



2017年  
「夏祭りの思い出」  
&  
「小さな秋見つけた！」

暑かった今年の夏。流しそうめん、スイカ割り、皿相撲大会、おみこしワッショイなど、たね祭りも最高に盛り上がり、楽しく過ごすことができました。

そして“中秋の名月、に始まり季節は秋へと—。爽やかな風に誘われて外出の機会も増えています。木の葉モールや西部運動公園、西南の杜公園と出かけました。





## 小さなたねの 新スタッフ紹介



北崎 小百合 (看護師)

10月からお世話になっている北崎です。毎日、子ども達に癒されています。慣れないこともありますが、子ども達が安心して楽しく過ごせるように頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



清田 雅子 (介護職員)

初めまして、清田です。以前12年程、知的障がい者の通所作業所で支援員をしていた時のご縁が繋がり、9月から介護職員として勤務させて頂いております。子どもは独立し、母と夫とのシルバー世帯の私にとって、「小さなたね」の日々は、利用者の皆さんに癒され、また活力を頂く毎日です。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



河村 紀子 (介護職員)

4月に入職しました河村です。青春時代はスポーツ一色で、剣道、水泳、機械体操、ランドホッケー等々、数年前はトライアスロンを目指し、仕事の合間にスポーツジムに通うほどでした。現在、次なるスポーツを模索中です。医療的ケアの必要な皆さんに寄り添う支援ができるように努めたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

ての人が何かに依存しながら、それを上手に利用して、毎日の暮らしを成立させているのではないのでしょうか。それから多くの仕組みが、いわゆる「健常」と呼ばれる人たちに合わせたものであって、そのような土台によって、私は自立しているなどということが可能なのであり、障がいのある人たちにとっても、そうした仕組みや土台があれば十分に楽しく暮らしていけるはずですよ。

私は、障がいがある人たちの「自立」の前に、「自律」が問われなければならぬのではないかと、考えています。すなわち「自律」とは、自らを「コントロール」する主体であり、自らで選択できる自由のことです。しかし、彼(女)たちが自分の身体を「コントロール」することは、非常に困難なことです。筋緊張による変形や拘縮が年齢と共に進行します。自由に会話することだって難しいです。日々の生活で痙攣に悩まされることになり得ます。自らの身体を「コントロール」が制御困難であれば、なおのこと人生



福岡上映会トークイベントにて

親たちが、彼(女)たちの「自律」とは何か、そして「自立」とはどういうことなのか。それを一緒に考えようではありませんか。最初から無理だとあきらめたり、決め付けたりしないで、一人一人の個性や可能性を大切にしながら、内面世界と向き合いながら、考えてみたいのです。きっと新たな暮らしの選択肢が広がっていくのではないのでしょうか。当事者たちも、支援者も、そして親たちにとっても、「親子げ後」という心配が、いつか消えてしまったために。